

平成 22 年 4 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530167

研究課題名（和文） ケインズとカレツキの経済学に関する研究

研究課題名（英文） Studies on Keynesian and Kaleckian Economics

研究代表者

鍋島直樹（NABESHIMA NAOKI）

名古屋大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：70251733

研究代表者の専門分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：経済学史、経済思想

1. 研究計画の概要

ケインズとカレツキの経済学を理論・思想・政策の三つの側面から総体的に再検討することを目的とする。とくに次の三点に重点をおいて研究を進めている。

第一は、ケインズとカレツキの経済政策論についての検討である。第二に、自由主義や民主主義をめぐる彼らの思想について再検討する。第三に、貨幣的要因が実体経済に及ぼす影響についての分析枠組みをさらに拡張していくことをめざす。これらの作業を通じて、ケインズとカレツキの経済学の今日的な意義がどこにあるのかを明らかにしようと試みる。

2. 研究の進捗状況

これまでの主な研究成果として、ケインズとカレツキの経済学に関する3編の論文がある。「ケインズ主義の可能性と限界——カレツキ経済学の視点から」（『現代思想』第37巻第6号、2009年）では、カレツキ経済学の視点によりつつ、戦後資本主義におけるケインズ主義の興隆とその危機について考察した。「カレツキの経済政策論——完全雇用の政治経済学」（『経済科学』第57巻第1号、2009年）は、カレツキが資本主義経済の矛盾と限界をどう捉えていたのかに注目しながら、彼の経済政策論の特徴とその意義について検討している。

これら2編の論文がカレツキとケインズの経済学それ自体を考察の対象とするのに対して、「ポスト・ケインズ派貨幣経済論の回顧と展望」（『季刊経済理論』第46巻第4号、2010年）は、ポスト・ケインズ派経済学の

最近の動向を概観することを通して、ケインズの洞察の今日的意義がどこにあるのかを探り当てようとするものである。

さらに2008年には、監訳者の一人として、ジル・ドスタレール著『ケインズの闘い——哲学・政治・経済学・芸術』を公刊した。哲学・政治・経済学・芸術という四つの軸に沿ってケインズの思考と活動について論じた、これまでに類書のない著作である。

新自由主義の限界が問われる今、資本主義経済の本来的不安定性に着目していたケインズとカレツキの経済学に総体的な検討を加え、それを通じて非新古典派の政治経済学の再生と発展の方向を探っていくことが、本研究の意図である。これまで、この課題を達成するべく研究を進めてきた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

現在までの期間に、ケインズとカレツキの経済学に関するいくつかの著書と論文を発表することができた。予定通り、理論・政策・思想の各領域において一応の成果を挙げることができており、研究期間中に当初の目的をほぼ達成することが見込まれる。

4. 今後の研究の推進方策

(1) ポスト・ケインズ派貨幣経済論の検討を通じて、ケインズ経済学の今日的意義をよりいっそう明らかにしていく。

(2) 自由や民主主義をめぐるケインズとカレツキの思想について、さらに考察を深めていく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ①鍋島直樹「ポスト・ケインズ派貨幣経済論の回顧と展望」『季刊経済理論』第 46 巻第 4 号、15-24 ページ、2010 年、査読無。
- ②鍋島直樹「カレツキの経済政策論——完全雇用の政治経済学」『経済科学』第 57 巻第 1 号、11-30 ページ、2009 年、査読無。
- ③鍋島直樹「ケインズ主義の可能性と限界——カレツキ経済学の視点から」『現代思想』第 37 巻第 6 号、220-32 ページ、2009 年、査読無。

[図書] (計 2 件)

- ①宇仁宏幸、坂口明義、遠山弘徳、鍋島直樹『入門社会経済学——資本主義を理解する [第 2 版]』ナカニシヤ出版、2010 年、226-283 ページ。
- ②G. ドスタレル著 (鍋島直樹・小峯敦監訳)『ケインズの闘い——哲学・政治・経済学・芸術』藤原書店、2008 年、全 704 ページ。